

熊本県農業研究センターの研究の現状

熊本県農業研究センター

組織

熊本県農業研究センターは、平成元年に、11の研究機関を組織的に一元化して設立された。

本部所在地（菊池郡合志町）に管理部と企画調整部の2部、農産園芸研究所と生産環境研究所及び畜産研究所の3研究所が配置されている。また、専門性の高い部門として県下各地に茶業研究所、い業研究所、果樹研究所、草地畜産研究所の4研究所と地域に対応した高原農業研究所、球磨農業研究所、天草農業研究所が配置されている。

センター職員数は、平成15年4月1日現在で239名で、そのうち本部に全体の約6割にあたる149名が勤務している。

主な研究課題と成果

熊本県農業研究センターでは、平成12年度策定の「県総合計画」及び「県農業計画」を基本に、高度化・多様化する消費者ニーズや環境問題などの新しい農業情勢を踏まえながら、本県農業の発展と農業者が明るい将来展望と意欲を持って取り組める活力ある農業の実現を図るため、農家の当面する課題や要望の強い課題を最優先に、生産現場に密着した研究技術開発に取り組んでいるところである。

1 主な研究課題

(1) 安全・安心農畜産物の生産技術

減農薬・減化学肥料栽培技術の確立

農産物の機能性成分の附加技術の開発（15年度新規）

消費者に信頼される野菜生産技術の開発（15年度新規）

コーデックス基準に対応した安全な農産物生産技術（15年度新規）

(2) 戦略的・総合的な視点に立った技術の開発

地産地消を支援する農畜産物の高付加価値生産技術の確立（15年度新規）

熊本県オリジナル農産物の標識による保証技術（15年度新規）

八代地域における産地再編の動きと持続的営農体系の確立（15年度新規）

(3) 高品質生産技術の開発

優良品種の育成・優良系統の選抜（水稻、野菜、花、茶、い草、果樹、牛、豚、鶏）

水稻、麦類等の品種特性に応じた栽培技術の開発

品質評価に基づく緑茶加工技術の開発

環境に配慮した低コスト良質豚肉生産技術の開発

品質保証果実生産システムの開発

「肥の豊」の栽培技術の確立

(4) 低コスト・省力化生産技術の開発

水稲の疎植栽培による省力安定栽培技術の確立

イチゴ高設栽培における安定生産技術の開発

花きの灌水同時施肥技術の確立

夏期乳増産のための飼養・繁殖管理技術の開発

放牧利用による家畜の低コスト生産技術の実証

(5) 環境に配慮した生産技術の開発

環境負荷軽減のための合理的施肥技術の確立

新しい土壌消毒に伴う微生物機能修復技術の確立 (15年度新規)

自然生態系に調和した茶栽培技術

家畜糞尿処理利用技術の確立

2 主な研究成果

水稲「秋音色」(H14.3出願公表)

薬培養技術を用い、粘りが強く、冷めても柔らかい「もち米」の特性を持った独自品種を育成。平成15年10月県の認定品種に採用。

ナス新品種「ヒゴムラサキ」(H14.6出願公表)

「赤ナス」として親しまれてきた熊本長ナスで果肉が軟らかく食味に優れ、収量・品質が安定する新品種を育成。

イチゴの高設栽培 (H11.1月特許出願)

窮屈な作業姿勢を長時間強いられるイチゴ栽培で、ほとんどの作業を立ったままの楽な姿勢で行える「熊本農研方式の高設栽培装置」を開発。チッソ(株)と共同開発。

熊本型新園芸用ハウスの開発

人力で組み立てられ、しかも台風等の気象災害に強い園芸用ハウスを開発。ハウス基礎にはスパイラル杭、骨材には高張力鋼を使用して強度を増すとともにコスト低下が可能。また換気面積を増やして夏季ハウス内温度上昇を抑制。

耕畜連携による成分調整成形堆肥を利用した新規形質作物生産システム

家畜ふん堆肥を主体とする成分調整成形堆肥を利用して、新規形質を有するダイズやメロン、トマトの地域内物質循環型生産システムを開発。

あか牛「第16光重」(H12.7月選抜・普及開始)

肉質(脂肪交雑)をはじめ、生産力が極めて優れている種牛を選抜。今後の基幹種雄牛として生産農家に凍結精液を供給。

・間接検定結果 脂肪交雑3.1(歴代1位:従来の最高は2.3)、 Ω -3脂肪酸面積52cm²(歴代3位)

熊本県産地鶏「天草大王」

昭和初期に絶滅した天草大王を、アメリカから輸入したランシャン種などをもとに復元。

天草大王の雄と産卵率の高い大型雌系統を交配して得られる交雑種を高品質肉用鶏として県下に普及推進中。

い草「ひのみどり」(H13.6 種苗登録)

輸入急増などで非常に厳しい状況にあるが、茎が細く畳表の仕上がりが美しいといった特徴を持つを品種育成。従来の品種「岡山3号」に代えて普及していく。これを原料とした畳表は「ひのさらさ」のブランドで高い評価。

「ひのみどり」のDNAによる品種識別技術

本県高級畳表ブランド「ひのさらさ」の原料となる「ひのみどり」に存在しないDNAを見いだした。このことにより「ひのみどり」と他の品種との識別が可能。

デコポン新品種「肥の豊」の育成(H13.3 種苗登録申請)

従来の「不知火」の弱点を改良し、従来品種に比べ酸味が低くなる時期が早く、かつ収量が多い品種を育成。現在、普及に向け苗木を増殖中。

カンキツ新品種「肥のあかり」の育成(H14, 3 出願公表)

本県の極早生温州ミカンには、9月下旬に出荷できる品種がなかったため、本品種を育成。

高糖度で酸は低く、食味が良好な新品種。

今後の課題

- (1) 従来の生産農家の視点に立った高品質・低コスト生産のための試験研究に加え、今後は、消費者や市場関係者の視点に立った研究を推進する必要がある。
- (2) また、県内には国公立大学、あるいは独立行政法人九州沖縄農業研究センター等の優れた研究機関がたくさんあり、これらとの一層の連携を図る。
- (3) 試験研究成果については、従来は内部関係者による評価を行ってきたが、今後は生産者や消費者等も加えた外部評価システム導入して客観的な評価を行う。
- (4) インターネット上でホームページを開設し情報提供をしているが、今後は生産者や消費者等との双方向の情報伝達を図る。

熊本県農業研究センターの組織と主な業務・研究概要

H15.4月現在

